

2010
Vol.12

THE BSSC JOURNAL

通巻12号 2010年8月20日発行



びわこ成蹊スポーツ大学新聞

Biwako Seikei Sport College

THE BSSC JOURNAL

びわこ成蹊スポーツ大学の「今」を伝える

©びわこ成蹊スポーツ大学新聞編集部

発行=びわこ成蹊スポーツ大学メディア研究会 〒520-0503 大津市北比良1204番地

http://www.bsscjournal.net/

夢舞台へ

プロ。スポーツに打ち込む選手なら、誰もがあこがれる夢舞台。今春卒業した4期生でプロ転向した女子テニスの樋口由佳(横浜テニスカレッジ)が7月18日、名古屋・東山公園テニスセンターで行われた東海中目選手権で初優勝した。プロ転向後、8戦目につかんだ初勝利は、未知の世界へ踏み出した大きな一歩になった。

樋口『やつと勝てました。私のスタイル、粘って、粘ってのテニスでタイトルを手にすることができ、プロの実感も少しわいてきました。上を目指すには、積極的なプレーに磨きをかけて、やっぱり全日本選手権の上位に入りたい』

挑戦

プロ転向後、びわスポのテニスの女王

樋口が初優勝

卒業から4ヶ月余り。関西学生や日本学生室内など数々のタイトルを手にしてきた樋口にとって、東海中目選手権はプロとしてやっていけるか、どうかの正念場でもあった。卒業と同時に各地のトーナメントを転戦する生活は、戸惑いと不安の連続だったという。集中力が欠け、せっかくのリードを守れずに逆転負けのパターンが続いた。勝てないもどかしさやふがいなさに、自分自身「いやになった」と悩む日が続いた。その不安定な気持ちも、大学時代から続ける猛練習で振り切った。卒業後もびわスポ大のスポーツ開発・支援センターの研修生として残り、後輩選手や気心の知れた男子選手と打ち合う練習で立ち直りのきっかけをつかむ。

東海中目選手権の準々決勝がたくましさを取り戻した樋口の真骨頂を発揮するゲーム展開だった。第1セット0-6、第2セットも0-3でリードされて開始から9ゲームを連取される窮地に立った。ストロークで粘って、粘って相手のミス誘うお得意の「持久戦」に持ち込み6ゲームを連取して逆転勝ちにつなげた。これで浮上のきっかけをつかみ、決勝はシード8位の川崎美を寄せつけずに威力のストロークで本来の力を発揮。6-2、6-4のストレート勝ちで待望のVを手にした。

樋口の普段の練習場は、4年間、仲間と汗を流し続けてきた本学のコート。植田実監督との指導は5年目に入り、練習パートナーは後輩の男子選手たち。打ち合えば、樋口の強力なストロークに大半の選手が振り回されてしまう。「学生気分が少しずつ抜けて、プロでやっていくのに、何が足りないか、上を目指す努力は何かを真剣に考えるようになった。ストロークで打ち合い、相手のミスを誘う『待ちのテニス』からもっと前に出る積極性を磨く」と張り切る。インドネシアの国際大会など今季は海外にも飛び出して、幅広いテニスを目指すが、プロ1年目の今季の目標は、昨年初めてベスト16入りした全日本選手権の上位進出。「本戦から出場できるので、今年は気分的にも楽し、昨年よりも順位をあげますよ」。日焼けしてこぼれる笑顔に自信があらわれている。

競歩の新星 丸尾が躍進

ホップ、ステップ、ジャンプの

みんなの笑顔がみたいから――陸上の第63回西日本対抗選手権大会男子1万5000m競歩でルーキー丸尾知司が44分40秒55で初優勝を飾り、関西学生選手権に続くビッグタイトルを手にした。表彰台の一番高いところを狙ったという自信で仲間を期待に応えた1年は、9月の日本学生選手権に照準をびたりと合わせている。

37人が参加した西日本大会の競歩1万5000mの序盤は1000mが4分10秒と速いペースの展開だった。6000mを過ぎたあたりで先頭集団は丸尾を含めた3人にしぼられる。「勝ちにこだわりたい」。強気な丸尾はライバルたちの揺さぶりに冷静に対処した。ラスト1周で鐘が鳴ると同時に一気にラストスパートをかけ、鮮やかなレース運びの逆転優勝にスタンドがどよめいた。

「今年は春から香港での試合や多くのレースに出場したため、疲労が残っていた。しかしみんなの期待と声援が力になり、誰よりも速くゴールすることができた。みんなに感謝しています」。心に留めている好きな言葉は「みんなの笑顔が見たいから」というが、初



Vは、普段の心構えも実を結んだのだろう。京都・洛南高校出身で、3年の高校総体5000m競歩で3位、国体優勝と輝かしい成績を残すなどエリートコースを歩んできたようにみえるが、競歩を始めたきっかけは、高校2年のとき、ひざを痛めて走れなくなったからだ。しかし、中学時代の栄光やプライドから「走る」にこだわらなくなり、競歩に専念することができた。高校2年の冬に左ひざの手術を受けてから「どんな競技でも、スポーツができることに感謝しなければ」と気持ちを切り替えて競歩に専念するようになった。競歩は走法が複雑で厳しい制約があり、またマラソンや駅伝などのように華やかなものではない。しかし、「また競技ができる」という喜びは、どん底からはあがった丸尾にとっては幸せなことだった。競歩に新天地を見出した丸尾は、いつも支えてくれた多くの人の「恩返し」を込め、どんなレースにもその気持ちを忘れずに臨んでいるという。

9月10・12日東京の国立競技場で開かれる全日本学生選手権に向けて丸尾は1



南島監督(左から2人目)を迎え、自主性を重視した練習で力をつけた選手たち

2年連続で 西日本大会の舞台へ 女子ソフト部

個性が強いメンバーが揃うチームに、新しい「顔」が加わった。6月から南島永衣子講師が監督になった。学生時代、ソフトボールで活躍した経験は、チームにとってはなによりも強い。その南島監督のさい配の初舞台が8月7、8日、北九州市で行われた西日本大学ソフトボール大会だ。

「指揮官といっても、私は選手みんなを後ろで支える役に徹したい。チームワークこそが、びわスポの大きな武器」と強調する。

練習では、自らバットを振り、ノックでナインを鍛える。飛び抜けた選手がいないうため、一人ひとりの個人プレーを大事にする。伝統でもあるチーム全員で繋いで1点、1点を積み重ねていく戦いを理想とし、南島監督も選手もこのスタイルを追求する。グラウンドなど環境に恵まれないチームだからこそ、余計にチームワークを重んじる。

春季リーグは1次を2戦2勝、2次リーグは2勝2敗の2部3位で西日本大会の出場権をつかんだ。昨年に続き2年連続の出場だが、昨年は1回戦で東海学園に0-7で敗退。果たせなかった「西日本で一勝」を目標に、チーム一丸となり、1回戦の名古屋大に7-0で大勝した。目標の「西日本一勝」を達成したが、2回戦でライバル天理大に0-10で敗れベスト16に終わった。



夢の扉まであと一歩――プロバスケットのbjリーグ・滋賀レイクスターズの「練習生」として本学2期生の伊戸重樹(25)が契約を結び、プロへの第一関門を突破した。本学から初の練習生であり、順調に行けば、初のプロ誕生が実現する。

長浜出身で京都・大谷高校から本学へ。身長170cm、体重64kgとプロの世界では決して恵まれたサイズではないが、ポイントガードとしての持ち味は高い評価を受ける。体格のハンデ差を感じさせないスピードと得点力が自慢だ。びわスポ在籍時は、相手が上位のチームでも毎試合30得点近くをあげ、外角の3点シュート

や狭いスペースでも鋭く切れ込むドリブルなど卓越した攻撃センスをみせていた。

大学卒業後、トライアウトも最終選考まで残ったが、あと一歩及ばずに入団契約をのがした。JBLリンク栃木の下部組織など下積みながらプレーを続けたが、苦勞の伊戸はもう夢でなく、手のかかるプロとしてコートに立つことを。そして、誰にも負けない気持ちで観客を魅了するようなプレーをしていきたい。伊戸は秘めた胸の内を打ち明ける。苦勞人の伊戸にとって、プロはもう夢でなく、手の届くところであり、手をかけた扉を開くだけ。その隙間からはもうまばゆいばかりの光がいま、いまかと零れてきている。まるで、彼がプロとしてコートに立つ瞬間を待ちわびているかのよう。

(競技スポーツ学科 3年 藤井あすか)

OBJリーガーの近藤(神戸)が メモリアルゴール

1期生で初のJリーガーとして活躍しているウィッセル神戸のDF、近藤岳人が、7月25日のJリーグ第15節の大宮戦で待望の初ゴールをあげた。プロ入り4年目の29歳があげたゴールは、近藤のJリーグデビューから10年が経ち、26日付の朝日新聞スポーツ面で大きく取り上げられ、本学サッカー部でも先輩ヒーローが大きな話題になった。

けがに苦しんできた近藤にとって、初ゴールはまさにメモリアルゴールだったろう。回り道をして03年に開学した本学に入学したときは22歳。プロを目指してひたすらがんばり続けた苦勞人。近藤のプロ入りを後押しした松田監督は「入学してきたときから、自分の目指していたプロの道を強く意識し、他の学生とは練習でも試合でも、目の色が違っていた」と近藤のがんばりを懐かしむ。

朝日新聞によると、大学時代の「点取り屋」のFWからサイドバックに転向し、戸惑いもあったが、どんな状況にも前向きに物事をとらえるタイプのJリーガー。「得点も取れるサイドバック」として新境地を切り開く遅咲きの大器として注目している。



神戸・近藤プロ4年目のメモリアルゴール

キャンプ実習で高大連携



大阪成蹊女子高の生徒を対象にした幼児教育コースキャンプが7月21日から2泊3日のスケジュールで本学艇庫周辺の琵琶湖湖畔で行われた。

本学生涯スポーツ学科野外コースの黒澤毅准教授とゼミ生ら18人が指導にあたったが、同じ成蹊グループであって和気あいあいのキャンプ生活になった。

テントの設営、炊事の基本を学んだほか、先輩学生からカヌーの運び方などを受けたり、ハイキングなどでチームワークを学んだり。黒澤准教授はこのキャンプを前に高校生らに「我慢すること」「仲間と協力」「前向きに挑戦すること」の3つのキーワードを受講生に徹底させた。キャンプ初日は、虫を見ただけで「キャー、キャー」悲鳴をあげていた高校生らが電気を携帯もないキャンプ生活を通して、生活力をつけてたぐましくなった。

また、野外コースでは24日のオープンキャンパスで参加した高校生らにアイスブレイキングを紹介し、いろいろなゲームを通じて仲間づくりの面白さ、楽しさをアピールした。

暑さを吹っ飛ばせ! キッズフェスティバル 大盛況!



スポーツ開発・支援センターが取り組むキッズプログラムがスタートして1年。近隣の保育園や幼稚園、小学低学年を対象に運動、遊びの楽しさを教え、生涯を通じて「スポーツライフ」の基盤を培ってもらう社会貢献事業だが、7月24日に本学キャンパスで第5回

キッズフェスティバルが開かれた。日中の気温が35度近くなる猛暑にもかかわらず、約1000人の子供たちが参加。サッカー部を中心にキッズリーダーの資格を持つ学生らが指導に汗を流した。ボールを使った遊びや体操、鬼ごっこなど約2時間の運動で子どもたち

は体を動かす楽しさを味わった。同センターでは、今後も学生らを対象にキッズリーダーを育て、キッズプログラムを普及させるのと同時に、本学教員が知恵を絞ったオリジナルプログラムを開発し、普及の輪を大きく広げる。

100m背泳ぎの横江が大会新で2連覇



2年連続の大会新をガッツポーズで喜ぶ背泳ぎの横江諒一と女子3位の辛島亜由子(右端)



100m背泳ぎで3位になった辛島の力泳

水泳の関西学生選手権は7月29日から3日間、大阪プールで行われ、初の1部昇格を果たした男子は背泳ぎのエース、横江諒一の活躍などで着実に得点をあげ、再び2部に降格した。

今年から日本学生選手権(インカレ)出場枠が拡大し、白木監督、選手らは男女とも団体出場権の獲得を目標に掲げて挑んだ。

その期待にこたえて、横江は100m背泳ぎで56秒60の2年連続の大会新で優勝。第1人者の入江陵介(近大)の日本記録52秒24とは大きく水をあげられていたが、横江の泳ぎにはまだ伸びる魅力がある。女子もホープ、辛島亜由子が200mで優勝、100m3位の成長株らしい勢いのある泳ぎをみせた。

白木監督によると、昨年の1部昇格をきっかけに選手たちの指導は、練習でも普段の生活でも自主性を重んじるように切り替えたという。部内のトラブルも自分たちで解決するようになり、練習では選手自身が目標タイムを設定し、陸トレ、泳ぎこみなど指示待ちの選手らの姿勢も大きく方向転換した。9月に東京で行われるインカレには男子は対校得点争いに初出場。個人種目のエントリーも男女合わせて1昨年の4人から昨年は19人、今年は21人に増え、年々レベルアップしている。「びわこから日本代表を」という白木監督の熱い思いは、着実な歩みをみせている。

1部で奮闘した男子競泳陣

奮闘した男子が1部残留

豊田ゼミ生が社会貢献にひと役



イチ、ニー、ゼミ生指導のストレッチが1日の活力に

建設現場で働く人に好評のストレッチ運動

桑原組の建設現場で作業員の始業前にストレッチ運動の指導を始めている。同建設会社の守山市民多目的体育館の建設現場で月2回、4年の守屋光君、土平友樹君、樋口公流君、大槻あやのさんと3年の會原義智君、藤川優さんの計6人が、始業前の午前7時30分から約15分のストレッチプログラムを作業員に手ほどきし、健康増進だけでなく、職場に活気を与えるストレッチ運動として喜ばれている。プログラムはメンバークラスが知恵を絞ったオリジナル運動だが、大槻さんは「建設現場で働く人たちが身体のだるさを解消し、ストレスが蓄積されやすいのかを検討し、音楽にあわせて取り組めるもの」を開発している。ストレッチ運動の後、参加した作業員からアンケートをとり、「現場の声を第一に」とプログラムを工夫する努力も重ねている。大槻さんは「私たちが学生が、工事現場で働く方々に何かよい影響をあたえることができたなら、私たちにとても本場に大きな経験になると、ワクワクしながら準備にとりかかりました」という。

メンバーのミーティングでは、常に現場で働く人々の立場からプログラムを考え、例えば、現場では身体のだるな部位を主に使うのだから、どんな体操なら身体が楽になるのか、など創意工夫のストレッチ運動を重ねていくうちに現場の人たちと学生の間には一体感も生まれた。ストレッチ運動は工事が終わる12月まで続くが、大槻さんらは「体操を通して元気になった、と実感してもらい、私たちが名づけたクワハラエクササイズを現場のみならずと一緒にと張り切っている」。

(競技スポーツ学科 3年 大槻あやの)



大津市立伊香立中学校3年生が一日体験入学

「スポーツの本場で、自分を磨こう!」。6月24日、大津市立伊香立中学校3年生22人が本学に1日体験入学した。望月聡准教授(競技スポーツ学科スポーツ情報戦略コース)にはサッカー、佐々木直基講師(同コーナングコース)にはバスケットボール、さらに豊田則成教授(同スポーツ情報戦略コース)からスポーツ心理学の講義を飛び級した学生気分を受講した。

中学生からは「日本代表コーチ(望月先生)に指導してもらい嬉しかった。こういう経験はめったにできないので良かった」とや「はじめはうまくいかなかったけど、丁寧な指導でレイアウトシュートが入るようになりました。自分の動きをコンピューターで分析して見せてくれたのがすごかった」「はじめてスポーツ心理学を学んだけど、すごく面白かった。集中していたので、あっという間の授業でした」など特別講義は大好評だった。

コーディネーターを務めた豊田教授は、「中学生にとって専門性の高い学びは、将来を見通すためにも、今後の学習にも、大きく貢献するはずです。これからも継続的に中学生の体験入学に取り組みたい」と意欲をみせる。豊田教授によると、伊香立中学校とは、今後も連携事業を継続的に活性化していく予定で、滋賀県内の中学校にも対象の輪を広げるといふ。

体験入学への問い合わせは(びわこ成蹊スポーツ大学、豊田研究室まで)077-5596-8459へ

4年目を迎えた

エッセイ発表会

山崎千穂さんと山下千衣美さんの作品が

最優秀に!!

前半クラス(A~H)

受賞	氏名	クラス	作品名
最優秀賞	山崎 千穂	Aクラス	心の支え
優秀賞	大友 優	Gクラス	ダイヤモンドストーリー
//	富森 清香	Bクラス	指導に対する想い

後半クラス(I~P)

受賞	氏名	クラス	作品名
最優秀賞	山下千衣美	Oクラス	当たり前でできること
優秀賞	善才 桜	Mクラス	強く、強く
//	安田 直人	Lクラス	15番目の選手たち



受賞した山下さん(左)と山崎さん

今年で4回目を迎えた1年のエッセイ発表会が7月12、13日の両日、大講義室で行われ、前半クラスでは山崎千穂さんが書いた「心の支え」と後半クラスからは山下千衣美さんの「当たり前でできること」の2作品が最優秀に選ばれた。

1年の教養演習の一環として始まった「エッセイを書く」とは、4週にわたって学生が文章力を磨くが、各クラス担任の指導で年々、筆力はアップ。最優秀に選ばれた山崎さんの「心の支え」は、ソフトボールでバッテリーを組んだと友人との絆をテーマに中学、高校までの6年間のドラマを熱く語っている。山下さんの「当たり前でできること」は、部活のバスケットを舞台に白血病で亡くなった先輩との出会いと別れを描き、「生きる」という真剣に向き合う大切さを訴えた感動の作品だった。また、優秀作の善才桜さんの「強く、強く」は、水泳を通して母と子の絆の深さを見事な会話で描いた秀逸の作品で、最優秀、優秀賞の6人は飯田学長から表彰された。最優秀、優秀賞の受賞者は次のとおり。

最優秀

心の支え

Aクラス 山崎 千穂

「千穂がいてくれて良かった。」
ボーカリエイスの彼女の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。それを見て私の視界がぼやけた。歩んできた道はますますぐちゃぐちゃ、迷ったこともある。でもいつも隣にきみがいたからここにたどり着けた。

小学3年生のとき、綾菜に誘われ私はソフトボールを始めた。ボールを打って走る、捕って投げる。何もかもが新鮮に感じられ、楽しかったのを覚えている。6年生になるとキャッチャーというポジションを任せられ、綾菜とバッテリーを組んだ。正直、綾菜は口数も少なく、感情もあまり表に出さないの何を考えているのか分からず、理解するのが難しい性格だった。それでも

最優秀

当たり前でできること

Oクラス 山下 千衣美

私は生きる。みなさんは、どういった気持ちで毎日を過ごしていますか?普通に生活することが当たり前になつてはいませんか?

高校に入学し、バスケット部に入部した私は、新しいことへの期待と不安とで胸を躍らせていました。顧問の垣内先生は身長190センチを超えるとても体格のよい威厳のある先生で、男女のバスケットの指導者として分け隔てなく厳しく教えてくださいました。私は、新しい環境の変化と先輩後輩の上下関係になかなか慣れることなく、自分のことで精一杯になっており、周りに目をやる余裕がまったくありませんでした。しかし、そんな生活も夏休みが終わるころには少しずつ余裕ができてきて、男子バスケットとも話そうになりました。男子バスケットの中で

なんでこんな言われてまでソフトしなかんねん。気が付けば口からは「やめます。」の一言。チームのことなど考えず、つい勢いで言ってしまった。無責任だった。そんな私を必死で止めてくれたのが綾菜だった。このとき綾菜が声をかけてくれたのだった。私は今なにをしていいかわからなかった。すると綾菜は、「千穂が決めたなら仕方ない。でも部活は辞めてもソフトはできるで。」そう言って、中学の練習がオフの日には私たちの原点である、小学時代のチームの練習に誘っては、キャッチボールをしてくれた。このときすでに、私の中で彼女の存在は大きいものになっていた。

そうして1年が過ぎ、中学3年生。日に日にソフトボールへの想いが強くなつていった私は、彼女に話した。「もう一回みんなとソフトがしたい。」彼女は喜んでくれた。しかし私は、こんな

なに都合の良い自分を他のメンバーが受け入れてくれるのかと考えると、すごく不安で怖かった。

1年ぶりに戻ったチーム。みんなからは、「おかえり」の言葉と、いつもの笑顔。みんなの温かさ、仲間を裏切った自分への嫌悪感から、言葉が出てこなかった。久しぶりにみんなとソフトボールは、まるで初めてするスポーツかのようにさえ感じられた。それくらい新鮮で楽しくて、でもとても懐かしかった。そして、私はようやく気が付いた。「ソフトボール」と仲間。それが私にとって、どういう存在で、どれほど大切なものなのか。だから、私はもう絶対に何があっても逃げない、ソフトボールと仲間を裏切らない、そう心に決めた。

そして私たちは、列々の高校へ進学した。楽しくソフトボールをしたいと思った私は反対に、綾菜はソフトボールの名門

校に行った。その中で、彼女は1年生からマウンドに立ち、みんなから期待されていた。そのことからプレッシャーに押しつぶされ、本当の自分を見失っていた。「もうソフトは高校で辞める。」彼女がそう言った時はショックだった。しかし私は、中学の頃に彼女にしてもらったことを思い出した。ずっと味方であってくれて、こんな私にソフトボールの楽しさや、仲間の大切さを教えてくれた。今度は私の番だと思っただけ。私たちは、またあの原点に帰り、ただキャッチボールをした。その原点も私たちを待たせてくれた。彼女は弱音を吐きながらも自分を取り戻し、国体には選ばれ、マウンドに立っていた。彼女が頑張ることで理由もなく私も頑張れた。

高校3年の夏、引退を迎え、進路に迷っていた。すると彼女は「東京の大学に行つて日本に帰って来る。」そう言って続けた。「4年経ったらまた受けてな。」

嬉しさと同時に、私の中で迷いが消えた。この一言で、大学でもソフトボールを続ける決心がついた。

そしてたっさんの人が行きかうホームで、私たちはいつものように他愛もない話をしていた。新幹線の音が会話をかき消す。「困った時はお互い様」どんなときも支えてくれた。言いたいことはたくさんあったが、彼女の目をみると何から話せばいいのかわからなくなった。出発を知らせるアナウンスが流れた。「ありがとう。千穂がいてくれて良かった。」そう言って振り返ることなく、新幹線に消えていった。親友の背中が、ぼやけて見えた。さよなら、ぐらいいで切れてしまふような儚い絆じゃない。痛みがあるから喜びがあるんだ。また会える。

彼女の言葉があったから、私は今ここに居る。

そんな楽しく辛かった、夏。秋が過ぎ冬もそろそろ終わりに近づいてきた2月の下旬。私たち男女1・2年は垣内先生に呼ばれて2階にある剣道場に移動しました。なぜ呼ばれたのかも分からず、みんながみんなザワザワとした気持ちで先生を待っていました。少ししてから先生が来て、真ん中に置かれていたパイプ椅子に腰をおろし、いつもなら手と足を組み胸を張ってこれでもかと思わせるくらい自分の体を大きくみせる先生でしたが、その日はなにかに魂を取られたかのように、気迫がなくなり、大きな体も小さく見えた感じがしました。そんな先生に違和感を感じながら、私たちは背中をピンと張り三角座りをして先生が話し始めるのを待っていました。

みんなの顔を一通り見た後、先生はゆっくりと口を開き私たちに話し始めました。その内容は最近からだの体調を崩して休んでいたマルさんについての話でした。風邪をよく引き、なかなか熱が下がらないようだったので、近くの病院で検査したところ、

結果がずず大阪にある総合病院を紹介されたそうです。いろいろな検査を受けた結果、マルさんの病名は急性白血病だったのです。私たちは愕然としました。白血病という言葉は、テレビドラマや映画の中でしか聞いたことがなく、現実、近くに発病するひとがいないので実感が湧いてきませんでした。白血病は、感染症による発熱、血小板の減少による出血症状および著しい貧血が起きます。たぶん一般の人からして白血病のイメージは不治の病だともっているひと、もしくは少ないと思います。ただ垣内先生は、早めに見つけることができたので、早くはないが治ると私たちに言ってくれました。私たちはその先生の言葉を黙って聞いているだけでした。

話を聞いてるうちに先生の口数も減ってきて、先生の目からは溢れるばかりの涙でいっぱいでした。先生は抑え切れない涙を必死に堪えて私たちに言いました。「大好きなバスケがしたくてもできない。今できることがどんなに素晴らしいか」私はそ

た総体予選を終えてすぐにマルさんはかえらない人となりました。たまの外出日にひよこりとと体育館を見に来たマルさんは、どれほどバスケがしたかったか、少しでも体を動かしてみたいか、少しも体を動かしてみたいか、たと思います。そしてこの夏男子は、念願の優勝を果たしインターハイへ出場しました。

私がこのエッセイでこの話を書こうと思った理由は二つあります。ひとつは、いままでことを当たり前だとか当然だと思つて欲しくないことです。やりたくてもできないという人がいるというのを知って欲しかったからです。もうひとつは、マルさんが存在したということを忘れたくないことです。人が死ぬときは人に忘れられたときだといっていました。私はこのエッセイを通してマルさんが存在したことを忘れないで、これから先を生きていこうと思えました。私は生きる。生きているからこそできること。

しかし、私たちが三年になっ

びわこ成蹊スポーツ大学

〒520-0503 大津市北比良1204番地
【代表】TEL:077-596-8410 FAX:077-596-8419 E-mail:jim@bss.ac.jp



JR比良駅から線路沿いに徒歩約15分。JR京都駅よりJR比良駅まで約40分。

2009年度教育振興会決算報告書

●収入の部

項目	決算額	備考
前年度繰越金	1,548,308	2008年度からの繰越金
会費	24,560,000	1,228名の会費
その他の収入	7,325	預金利息
合計	26,115,633	

●支出の部

項目	決算額	備考
教育・研究に関する支援	2,400,000	教育用備品購入 他
学生の学習環境の整備に関する支援	2,300,000	施設設備支援 他
学生の福利厚生に関する支援	9,450,000	奨励金、スクールバス、卒業記念祝賀会 他
学生のクラブ活動に関する支援	7,200,000	クラブ活動補助、大学祭補助
その他振興会の目的に必要な事業	1,723,247	総会、通信費、大学の情報誌発行補助、慶弔費 他
積立金	1,000,000	将来計画積立金
次年度繰越金	2,042,386	2010年度への繰越金
合計	26,115,633	

2010年度 教育振興会役員

役職名	会員氏名	学年
会長	安藝 多佳	3
副会長	高野尾 豊	3
副会長	小林 一生	1
会計	阿部千賀子	2
会計	五十嵐信博	2
会計監査	内藤久美子	3
会計監査	中野 光平	2
幹事	樫内 弘昭	1
幹事	西本 佳子	1